漢字誤用の分析

――総合コミュニケーション能力の育成を目指して――

盧　　濤
広島大学総合科学部

Reading maketh a full man; conference a ready man; and writing an exact man.
――Francis. Bacon. *Essays.*

ああ，おとなと言う，想像力の片鱗だに持ちあわせぬ人間！字づらが簡単に見える，ただそれだけのことで，彼は，片カナの方が漢字よりやさしく，したがって子供の頭脳を疲労させず体力を消耗させないと思いこんでいたのであった。けれども私にしてみれば，片カナや平がなには，たとえば「櫻」の文字のような―「花びらふたつ，女の人がきれいきれいと言っている」―ヒントはないのであった。　――犬養道子『花々と星々と』

1．はじめに

ここ数年，日本人大学生が書いた日本語を目にする機会が増えてきた。レポートと卒業論文の他に，手書きの授業アンケートやさまざまな感想文，入学試験や期末試験の答案，ゼミ発表のレジュメや外国語（中国語）の日本語訳などなどである。1つ気になることがある。それは漢字の誤用である。いくつか例を見よう。

（1）様々な文野（分野）の本を読みたいと思う
（2）アメリカの文化は，日本にかなり侵透（浸透）している
（3）もっと責極（積極）的に読書をすればいいと思う
（4）大低（大抵）本を読む時，一文一文きちんと読んで咀嚼しているのではなく
（5）自分の考えがあまりにも挟く（狭く），あさはかなものだった

上の誤字を見ると，大学入学試験の設問である「○肉○食」の答えに，期待はずれの「焼肉定食」を書くというのは，洒落でも作り話でもなく，現実的に起こりうることだと思えてくる。言語能力でもあるはずの漢字能力の低下は，切実で深刻なものであると言っても過言ではなかろう。

本稿は，筆者が収集した日本人大学生による誤用漢字のデータを公開し，誤字の類型と原因と影響を分析して，大学生に対する，外国語能力を含めた総合コミュニケーション能力を高める一環としての漢字再教育を喚起することを目的とする[1)]。

2．漢語表記の誤用

大学生の漢字誤用は，さまざまなパターンに分かれている。語種的に漢語（字音語）の表記と和語の当て字に大別される。漢語の場合にもっとも多く観察されるのは，漢語熟語にまつわる同音漢字の混用である。その混用をさらに分けると，1）部首誤用；2）別字代用；3）別語代用；4）非同音字代用という4つのパターンがある。

2.1. 部首誤用

字素である部首の誤用には，部首脱落，部首添加，部首混同といった3つの種類がある。部首

脱落の例を見ると，

（6）多くの日本人はあまり責極（積極）的でなく

（7）その映象（映像）を見ただけでの感想を書く

（8）とても不思義（不思議）な感じでした

のように，それは略字のように書くという書字の簡略化，単純化という現象である。

一方，部首を余分に添える例も見つかる。

（9）そこに読書をする最大の意議（意義）があると思う

(10) 私は，東洋史概論を授講（受講）しているが

(11) 第二外国語と併列（並列）して授講（受講）する意味がわからない

(12) この読書感想文のための文障（文章）もきっと自分のこれからの人生で

部首脱落と部首添加に加え，より多く見かける部首誤用は，部首混同の例である。

(13) 連載されているマンガの１つに曹操を主人公としている慢画（漫画）がある

(14) 男尊女卑の習慣が侵透（浸透）している世界

(15) それを被露（披露）しているのもすごいと思った

(16) そのような多くの犠性（犠牲）によってなされた革命

(17) 多くの人の犠姓（犠牲）があったことも事実であると思う

(18) 最後に逮補（逮捕）されてしまったおじいさんの無実を訴えるため

(19) 境偶（境遇）も何もかもちがう変面王を師匠として

(20) 大低（大抵）の人の本音だと思う

(13)－(15)は熟語の前項漢字が誤っている例であり，(16)－(20)は熟語の後項漢字が間違っている例である。似て非となる字形の認識の問題ではあるが，ほとんど右側，旁の音符ではなく，左側，偏の意義符を間違えがちなのが面白い現象である。それは，漢字の意味（字義）を問わずにして音声感覚に基づくものであると解釈されるが，他の漢字誤用類型にも同じような傾向があるのではないかと想定できる。

部首誤用は，識字能力の低下と書字態度の問題として考えるべきである。「義」と「議」の混用や，「受講」を「授講」に，「並列」を「併列」にするのは，漢字の意味を理解できていないための誤用といってよい。「併称・並称」，「併置・並置」，「併存・並存」，「併進・並進」などのように，「併」と「並」は交替可能な場合もある。しかし，元々「併せる」を意味する「併」と「並ぶ」を意味する「並」を理解できないと，意味的に分化され且つ表記的にその書き分けが定着している，「並立」，「並列」と「併用」，「併有」，「併設」などを書き分けられることが保証できない。「漫画」を「慢画」にすると，逆に「怠慢」と「怠満」を混同してしまうことも十分ありうる。「積極」を「責極」に，「文章」を「文障」に，「犠牲」を「犠性」と「犠姓」にするのは，識字能力というより，書字活動に対する，不用意で漫然とした態度の現れとして捉えられる。

2.2. 別字代用

部首誤用のように漢字の一部を書き間違えるのと並んで，漢字熟語の一字を丸ごと別字に書き換え，非漢字熟語（擬似漢字熟語）を作るような，別字の代用という漢字誤用も顕著である。

(21) さまざまな文野（分野）で英語や韓国語，中国語などの他の国の言葉を

(22) 私がイメージしていた中国の主相（首相）は，頑固で，どこか，国家主義であるというものでした

(23) 作者の意見に参成（賛成）です
(24) 都市部との教育隔差（格差）も気になるところではあった
(25) 違文化（異文化）体験はなかったように思う
(26) 鉄頭にはあまりよい映響（影響）を与えなかった
(27) 思想の等合（統合）やその強制的な姿勢がほぼ北朝鮮と同じ

(21)－(27)は，前項漢字が誤っている擬似漢字熟語の例だが，次のように後項漢字が間違っているものも多い。

(28) 昨年の日韓ワールドカップで確心（確信）しました
(29) それを見守るディの表状（情）が印象的だった
(30) 筆者は読み方の質が変わってくることを強張（強調）している
(31) 主人広（主人公）の父さんと母さんの純粋な気持ちには心打たれました
(32) 研究する場合に読書は必要不可決（不可欠）であろう
(33) 強裂（強烈）な異文化体験をしてみたい
(34) まだまだ味読，熟読までは到定（到底）出来ないが
(35) 岩国の町をウォークラリー形式で散索（散策）した
(36) こんなにいっぱい本を読んだんだと自満（自慢）できるようになりたい
(37) あんなに違うとは全々（全然）知らなかった

別字代用の中には，「主相」，「確心」，「表状」のように，簡単な漢字を優先的に選択して書くものもあれば，「隔差」，「違文化」，「自満」のように，漢字の意味を把握していないため別字を使うものもある。同音という単純な理由で同音漢字を混用して作り上げた，「違文化」や「全々」のような造語からみれば，漢字誤用は正確な語彙理解と語彙使用の妨げになりつつあるといえる。実際，漢字の意味を問わないあげく，中国の固有名詞を間違えて記憶し書くケースもある。

(38) ストーカー対策として小林寺（少林寺）を身に付けたいと思っている
(39) 気孔（気功）の修業もやっていました

2.3. 別語代用

上の別字代用と関連することだが，別字の代用により，別語代用という問題が生じてくる。上で言及した語彙理解と語彙使用という語彙力の問題として注目すべきである。

(40) 中国の主脳（首脳）としては初の試みというのもあって
(41) 当事（当時）の中国の時代が反映しているかのように
(42) 僕自信（自身）中国へ行ったことはないのですが
(43) 面子は人間間の相互作用が体言（体現）する一種の人間社会価値である
(44) 人口が増えすぎても食料（食糧）などの問題があるし

「中身」と「中味」，「焦燥感」と「焦躁感」が併用されるように，漢字表記には，書き換えが許容されるものが確かにある。これらも一種の「漢字混同」であろうが，規範とされるものである以上，誤用と言えないであろう[2]。しかし，「体言」と「体現」のような混用は論外である。また，「当時」と「当事」，「自信」と「自身」のような混同は，不注意による単純なものと見なされよう。それにしても，同音異義語である「主脳」と「首脳」，「食料」と「食糧」の混用は，語彙力の不足によるものと見てとれる。この同音異義語混同のような誤りは，これから検討する和語当て字にみる同訓異字の問題に繋がっている。

2.4. 非同音漢字代用

同音漢字とは異なり，字形の類似性により，異音漢字を同音漢字のように代用する例も目立つ。これは字形認識の誤りではあるが，存在しない擬似漢字熟語を作り上げるという語彙の観点からみれば，別字代用と同様の問題になる。

(45) 暗踊（暗誦）は子どもに世界の広さを与える
(46) 中国の戦後の社会についての知織（知識）があまりなかった
(47) 多くの本と出会い多くの経験を積みたいと純砕（純粋）に思えた
(48) 首をつって座弾（座禅）をくむのは何の修行になるのか理解不能だった
(49) 一言でいえば根拠のない民間信柳（信仰）そのものでした
(50) 麻省（麻雀）をやって，1～6までの言い方を覚えれた
(51) 私の一番最社（最初）の異文化体験は高校生の時に覚えたマージャンです
(52) その家に桑道（柔道）の勉強に来ていたフランス人の人に会って

「知識」を「知織」に，「最初」を「最社」にするのは，「うっかり書き」の類のものであろうが，「誦」，「粋」，「禅」，「仰」，「雀」を正確に書けないのは，その漢字の熟知度が低いということができよう。前項漢字ではなく，ほとんど後項漢字が誤っているのもその事実を物語っている[3)]。

3．和語当て字の誤用

大学生の漢字誤用は漢語にとどまらず，和語の当て字にも見られる。

「とる」や「さす」，「はかる」の当て字は何か，また「言葉を使う」なのか，「言葉を遣う」なのか，和語の当て字に「ゆれ」があり，常にその選択で悩まされるのは，日本語の正書法の問題として議論されている。しかし，以下の例に示すように，こういった同訓異字より当て字の問題は単純化されている。

(53) 学校の授業以外で他の国の文化に解（触）れたことがなかった
(54) 日本人だと，どうしても挟（狭）い考え方になってしまう
(55) ホテルを無料で深（探）してくれました
(56) 中国の生活様式を恒間見（垣間見）ることができました
(57) 今の子供はマンガを読むことさえも謙（嫌）うらしい
(58) 話の節（筋）はあまり分からなかった
(59) 暗誦したフレーズと供（共）に発音も身体で覚えられる

これらの誤用例は，2節で調べた字形認識による部首誤用や別字代用に相通ずるものであり，同訓異字選択以下の問題である。漢字表記と同様に，音声から類推して別字を当てるタイプも目にふれる。

(60) そこは，本当に身習（見習）うべき所だと思う
(61) 彼らは小さい頃から道場に入り，ちょっぴり可愛相（可哀相）だとも感じた
(62) 最初白黒のシーンで初（始）まり

「見習う」を「身習う」に書き換えるのは，「み」という音からの類推であり，「可哀相」を「可愛相」にするのは，「可愛い」と「かわいそう（可愛そう）」を連想したのであろう。(62)は，名詞としての「始まり」と「初まり」，「初め」と「始め」，そしてまた副詞としての「始めて」と「初めて」の存在から類推して，動詞の「始まる」を間違えたものとみてとれる。漢字誤用に見る語彙誤用の問題は，和語にも出てくるわけである。

上の２つに加え，僅かながら，以下のような別字，別語代用も目にとまる。

(63) 最後にクーワーと王は固い粋（絆）で結ばれていた

(64) 厳しい修業にはげんで体を厳（鍛）えていてすごいと思った

「狭」と「挟」，「深」と「探」，「節」と「筋」の混同と同様に，(63)は，「粋」と「絆」の字形の類似性による誤りである。(64)の「鍛える」を「厳える」に書くのは,「鍛える」から「厳しい」や「厳格」を連想したものと思われる。

従来，漢字誤用の類型について，多くの分析が行なわれている。花田（1988）の研究が参考になる１つである。花田は，(1)×干→千というようなよく似た字体のため誤る例と，(2)×専問→専門，解放→開放というような同音のため誤る例と，(3) 勤－努－務というような同訓のため誤る例と，(4)四字熟語で誤る例を挙げ，中学生が誤りやすい漢字を類型化している。一方，川瀬(1988）が外国人留学生の漢字誤用のパターンとして，(1)字形の類似した別字を用いる（昨年→作年）；(2)部首を取り違え類似した字形を創作する，また別字をあてる（昭和→招和）；(3)筆画の一部を脱落する（日本→日木）；(4)余分の筆画を加える（東京→東京）；(5)旁の一部分，あるいは構成要素の一部を誤る（見る→貝る），というような５つのパターンにまとめている。

ところが，我々が見てきたように，大学生の漢字誤用は多様化しており，外国人の漢字誤用ほどシンプルなものではないにしても，それに近い単純なものも見受けられる。外国人日本語学習者が「見る」を「貝る」に書き間違えるというようなことがなかろうが,上で見た「身習う」,「挟い」,「解れる」などのように，漢字誤用がますます単純化に向かっていく一方である。外国語教育，外国語学習と平行して，母国語としての漢字教育，漢字学習に改めて取り組むことが要請される時期が訪れていると言えよう。

４．書字能力低下の原因

なぜ，漢字誤用はこれほど深刻なものになっているのであろうか。

花田（1988）が当時の状況を分析し，漢字力欠如の理由として，以下のようなものを挙げている。

① 漢字に対する意識が低い。
② 漢字習得の意欲に欠ける。
③ 読書量が減っている。
④ 辞書を引く習慣がない。
⑤ 書くという作業が減少している。
⑥ 作文や日記に漢字を使わない。
⑦ クラブやテレビなど，他の時間がふえて漢字に触れることが少ない。
⑧ 漢字環境が昔とはいちじるしく異質になっている。
⑨ 制限漢字だけですませる傾向がある。
⑩ 社会文化が下落している。

パソコン使用という昨今の事情を考えれば，状況は少しずつ変わってきたし，花田氏の分析も重複したりするので，我々は，以下のような６つの理由に帰結することができるのではないかと考える。

第一に,漢字の構造に起因する。字形の類似性が書字と読字を困難にさせることが事実である。意味的に武器と関連する,「弋」（ヨク),「戈」（カ),「戊」（ボ),「戉」（エツ),「戍」（ジュ),「戌」

（ジュツ）（加納 1973，60 頁）を眺めると，識字の難しさを否定できない。古典的な例となっている，「専門」と「専問」，「浸透」と「侵透」の混同からみて分かるように，字形の類似性や書字的複雑性の問題は，宿命的に漢字に存在しており，正確に書くことが必然的に難しい。表音文字（仮名）と表意文字（漢字）を併用するような「複合表記法」の日本語の話者にとってはなおさらである。大学生の誤字の中には正誤の判断が難しい用字もあるのであろう。また，以上で見たように，同音漢字（同音異字）の書き分けは，大学生にとって深刻な問題になっている。漢語を構成する漢字音の種類は，300 ほどあるとされるが（真田 1988），意味の似通った同音漢字が必然的に混同されやすい一面を有する[4]。「カン」と「コウ」という音節に当てはまる漢字はそれぞれ 100 ほどあるという事実を思い起こせば，納得できる。しかし，漢字認識を含めた識字教育を徹すれば，それを克服することができないことはない。1981 年に定められた「常用漢字」の範囲からみれば，漢字構造に起因する困難は，以上のような漢字誤用をもたらす決定的な要因では決してない。

第二に，漢字教育全体の問題である。各種調査によると，社会一般で普通に使われている漢字の数は，3500 字前後という。にもかかわらず，常用漢字を 2000 字以内に制限するのは，乖離現象と言わざるを得ない。そして，漢字能力を身につけるもっとも重要な言語形成時期にある小学生は，6 年間の習字の数は 1006 字に制限されるのは，明らかに問題である[5]。「唱」が常用漢字に入っているから，「暗唱」は書けるのだろうが，「誦」は常用外とされるので，「暗誦」を「暗踊」に書くのではないかと推測ができる。最近，常用漢字を増やしたり，小学校における識字教育を重視しようとしたりする動きが出てきており，漢字教育方針の見直しは意義が大きい[6]。

第三に，書字活動の欠如である。花田氏が指摘した，読書量の減少や辞書を引かないなどが間接的な原因であろう。近ごろ学生が電子辞書などをよく利用するようになっているにも関わらず，誤字は後を絶たない。根本的な原因は，手を動かすという身体的な慣習化は確立されていないことにあるのではなかろうか。今日では書字活動は極めて乏しい。小中高校の学校教育現場においては，文章を書く訓練も行わなければ，文章を書く機会も与えていない。携帯電話などでメールを作成する際でも，略語または「絵文字」，「顔文字」を使うことに象徴されるように，漢字を極力避けるのが実態である。

第四に，貧弱な書字活動とあいまって，もう 1 つ指摘しておくべき問題は，書字態度，姿勢である。何事でも「スピード」を最優先に求める「速度の文化」の中で育てられた大学生であるだけに，書字活動を含め，物事に対する態度と姿勢が問われる[7]。「首相」を「主相」に，「分野」を「文野」に書くのは，心理学的に分析する余地があるが，一種の「うっかり書き」，「書字スリップ」（slip of hand）など，不注意によるものにも見て取れ，余裕をもって丁寧に物事を扱うというようなスタイルが薄れつつある。しかも，「戦争はヒサンだ」，「南京大ぎゃく殺」，「一生けん命」，「中途はんぱ」のごとく，漢字仮名混じりの交ぜ書きや，「漫画」の代わりに「マンガ」と便宜的に片仮名で済ませるなどのように，書字活動の場合，便宜主義が蔓延している。これらは，便利さを求める現代人のスタイル，態度または性向の反映と言ってよい。勉強の意義を見失う生徒たちは，そもそも「勉強は面倒くさい」という単純な理由で学習を嫌がっている，という事実を併せて考えると，書字能力の低下は書字態度の問題でもあると結論づけることができよう。

第五に，語彙力の低下である。漢字と語彙は，コインの表裏のような関係にある。貧弱なボキャブラリーは，漢字能力の低下をもたらすことも考えられる。実際，「就中（なかんずく）」を「シュ

ウチュウ」と呼んでしまうのを耳にしたことがある。これは，明らかに「就中」という単語をインプットしていないためにミスしたアウトプットである。誤字にも同じことが言える。「以心伝心」や「通勤快速」が下敷きになっている「以心電信」（志田 2001）や「通勤快足」のような創造，洒落は受け入れられるのだが，「主人広」や「違文化」は創造でも洒落でもない。その語彙の熟知度が低いことの現れ以外の何物でもない。上で言及した「首脳」と「主脳」,「食料」と「食糧」のような同音異義語の混用は，漢字誤用の結果でもあり，原因でもあると思われる。

第六に，漢字否定論の悪影響である。財団法人日本漢字能力検定協会主催「漢字能力検定試験」の志願者数は，2002年今現在200万を超えているといい（当該協会のホームページによる），「漢字ブーム」が起きているようである。また，漢字の意義を語る「漢字擁護派」の意見も多く聞かれる。鈴木孝夫氏の主張は，その代表的な意見の1つになろう。

> 日本の言語学者をも含む多くの知識人が，明治以来抱き続けて来た，この日本語における漢字表記に対する否定的評価の根拠は，今やワープロを始めとする漢字機械処理の進歩，そして何よりも，＜教育の普及を阻害し，科学技術の導入を遅らせ，社会的発展をさまたげる，非能率きわまる古代的な文字＞と非難された，まさにその漢字を使う国々が，いまや西欧先進国に，あるいは追いつき，あるいは肩を並べる発展をとげているという明白な事実の前に，見事に崩れ去ったのである[8]。

しかし，英語一辺倒，母国語教育の軽視という勢いの中で，漢字の功罪を論評し，漢字文化からの脱出を図ろうとしながら，漢字使用を意図的に回避する傾向が見られる。鈴木氏が言及した漢字否定論は未だに根強いものがある。数百万部売れたという，『国民の歴史』（産経新聞社，1999年）という本の中で，著者の西尾幹二氏が漢字漢文を否定し，次のように述べている。

> すなわち漢字漢文の伝達力には必然的に制約がある。きわめて大雑把な，決まりきった定型しか表現できないという欠点がある。漢字漢文は不完全な言語である。情緒を表現することができない。論理とか道筋とかを正確に伝えることが出来ない（133頁）。

そして，専門家とされる岡田英弘氏の発言をその論調の根拠として引用されている。

> 独創的な意見や独自の感じ方を，漢文で表現しようとするとまったく不能。ありきたりのことしかいえないというのが漢文の宿命なんです。しかもこのことは，論理の表現の方法がない，それから感情の表現がないという恐るべきことです。ですから，漢字漢文というのは非常に情報量が少ないんです（136頁）。

このような漢字否定論の持ち主が，教育政策の制定に参画したり，教育活動に直接関わったりすると，漢字教育が疎かにされ，漢字誤用が助長されることは自明ではなかろうか[9]。

5．漢字誤用の影響

漢字誤用は多くの悪い影響を与える。ここにおいて，4つほど指摘しておく。

まず考えられるのは，識字能力の低下がエスカレートし，漢字の判断力も弱まることである。当たり前のことだが，豊かな表現力が深い理解力を保証するのと同様に，豊かな漢字書写能力が豊かな漢字識字能力ひいては豊かな日本語理解の能力を保持するに違いない。我々が分析した漢字の誤用は，一部はうっかりして間違えたものであり，パソコンで文書を作るとなると，正確に漢字変換ができると期待されるかも知れない。しかし，文字の読み書きができることを意味する識字能力は徐々に読字能力に傾斜し，書字能力が弱まっていくと，言語表現の総体能力の弱化に繋がりかねない。実際のところ，パソコンで作成した日本語にも，誤用漢字が続出しており，漢

字を書く能力の低下の「つけ」が回っているという感触が持たれる。その例を見ると，漢字変換に必要な漢字判断力のなさの実態が浮き彫りになる。

(65) 上記した「一人っ子政索（政策）」の影響で

(66) いくら著明（著名）な文化人であっても

(67) 語の意味の共時的な研究と通事（通時）的な研究

このように，「理解漢字」にとどまると，「表現漢字」が弱まるだけでなく，漢字判断もあやふやになりがちなのである。「みる」を「見る」以外に，「視る」，「観る」，「覧る」，「看る」，「瞻る」，「瞰る」，「瞥る」などと表記し，「高踏的な低徊趣味」を楽しむ必要はなかろうが[10]，十分な漢字判断力が不可欠である。

それから，漢字誤用は，個人レベルの問題から社会全体の問題へと発展することである。実際，ビジネス，教育現場，マスコミにおける漢字使用の混乱が少しずつ起こっている。『週間100人』という雑誌の創刊号（2003年6月17日発行）には，近代中国史を語る上では欠かせない，宋慶齢をはじめとする三姉妹のことを，「宗家の三姉妹」と綴っている。上で見た「少林寺」を「小林寺」に，「気功」を「気孔」にするのと軌を一にするものである。ある新聞社が主催する美術展示会場で，画家のプロフィールに「修士過程」というような誤植が公然と載せられているのを目にしたことがある。学会発表のレジュメに誤植を頻繁に見せられるのも，またよく経験させられる事実である。2003年11月に行われた関西のある大学の推薦入試で出題ミスが見つかり，仕方なく受験者全員を合格にしなければならなかった。それはなんと誤字・脱字が11ヶ所にも上がっていたということである。学校の教員を含め社会人が書いた日本語の中に出てきた誤字の例を見ると，漢字誤用の「社会化」という問題提起に頷けるであろう。

(68) 100人規模の日本人の集団に合（会）うのは初めて

(69) また女性の役割認識も代（変）わってきている

(70) 中国人は伝統的にお互いに感心（関心）を持ち，助け合う

(71) 米中接近以降の「改革・解放（開放）」政策への転換以降は[11]

これらを単にワープロのミスに帰結することはできない。新入社員の日本語能力の低下を嘆く企業人は，上のような誤用漢字が目にとまる瞬間，そのような感想をもたらしたのではなかろうか。社会人の予備軍として迎えられる大学生を多面的で的確に育てていくことを大学機関の任務とされる。外国語教育も重要だろうが，日本語教育でもあるはずの漢字教育は先決問題として位置づけるべきである。

さらに，表意文字であり，表語文字（単語文字）(logographic writing) でもある漢字である以上，その誤用は，語彙能力ひいては言語表現能力の低下をもたらすことになる。従来，漢字教育の意義を論じる際，字形と語形の相関についてよく言及される。字形の誤認が語形の誤認を引き起こして，語彙の理解と使用を間違えてしまうことに関しては，今までの分析からも分かる。漢字誤用にみられる語彙誤用の例をもう少し見よう。

(72) 読書の大切さを感じた文書（文章）でした

(73) なんとも感情輸入（移入）しづらい映画でした

(74) 巨大な市場としての魅了（魅力）をもつ中国

(75) 日本では「無言（不言）実行」が美徳とされていますが

書き分けを含めた正しい漢字の使い分けは，正しい日本語の理解と表現につながることは言を待たない。漢字能力の低下により，「酒は百薬の長」を「酒は百楽の長」に，「波瀾万丈」を「波

乱万丈」に書き換え，理解されてしまう（志田 2001，25 頁）。また，類似音の漢字を無視して，「望外の喜び」を「法外の喜び」と（志田 2001，189 頁），「喜捨」を「寄捨」と（志田 2001，82 頁）書くように，「新語」を創出してしまう。漢字誤用による語彙混乱の局面を避けたいものである。

最後に，書字活動は学習活動，日常生活活動の一環であり，便宜主義的書字姿勢は，学習，生活のスタイル，態度に悪影響を与える。すでに指摘したように，漢字を単純化して，場当たり的に書くのは，物事を便宜的で簡単に済ませようとする現代人の性向の現れとも言える。ワープロのミスとされる，「戦士」と「戦死」，「華僑」と「架橋」のような混同は，漢字誤用そのものではないが，入念に文字や言葉を確認する習慣が薄れている側面を覗かせ，一種の漫然とした態度としか言いようがない。外国語を含めた言語学習は，宮本武蔵が言うところの「千日の稽古を鍛とし，万日の稽古を錬とす」（『五輪書』）を肝銘するべきものである。便宜主義的な書字姿勢から，一種の鍛錬とも言うべき外国語の学習に根気良く取り組むことは，到底考えられない。そのような態度をもって，学習活動にあたると，教育活動を「押し付け」，「教えこみ」として捉え，その活動を放棄する可能性が出て来るとも分からない。冒頭に引用したベーコンが言う exact man を育成するためにも，漢字再教育を提案すべきではなかろうか。

6．終わりに

若者は日本語能力が弱く，日本語が乱れていると嘆かれている。文法や表現の乱れ，語彙や意味の乱れに注目されがちであり，以上で検討していた漢字誤用のような乱れにも目を向けるべきである。我々が分析した大学生による漢字誤用がその一側面に過ぎない。1006 字の「教育漢字」を収めた「小学校学年別学習漢字配当表」を調べてみると，大学生の誤用漢字は一部小学生が学習する範囲に入っていることが分かる。「当世大学生小学生気質」と揶揄しても始まらない。漢字の字形認識や字体の観念確立などの漢字学習は，外国人に対し行なう日本語教育でいう非漢字圏学習者にとどまらず，日本語を母語とする日本人学生にとっても切実な課題となりつつあるのである。外国人日本語学習者にとって問題になりそうな，「異」と「違」，「併」と「並」の使い分け（真田 1988）は，日本人大学生も現に出来ていないのである。理解能力としての漢字を読む力，いわゆる識字能力よりも，表現能力としての漢字を書く力，書字能力の育成が大学における言語教育の緊急課題になっており，外国語教育の意義を語る以前に，母国語日本語教育のあるべき姿を改めて考え直しておくべきであろう[12]。

言語学習は，ライフワークであり，母国語，外国語を問うことはなさそうである。

注

1）データを提供してくれた広島大学と広島修道大学の学生諸君に感謝したい。外国人として，こういった問題を取り上げるのは，僭越な感を与えるのではないかと躊躇していた。それでも，普段のコミュニケーションに見せてくれた一部の学生の素直な態度に感心して，本稿の執筆を決心した。また，有難いことに，同僚の山田純教授に原稿に目を通していただいた。その貴重な心理言語学的知見を活かすことができなかったのは残念だが，またの機会に譲ることにする。

2）実際，この「書き換え」の規範化には問題がないわけではない。1946 年に公布された「当用漢字」（1850 字）では，字数を制限したり略字体を認めたりしたが，漢字混用の問題の発端

といえよう。1981 年に改めて「常用漢字」(1945 字) が公布されたが，漢字制限によって生じた問題は依然として残っている。「常用漢字表」にないので，「誰」を仮名で書く（富田 真田 1991，6 頁）というのは，いかがなものかと問われるのであろう。

3）非同音漢字代用の例として，この他に，「授業は多くを学ぶのはムリなので，決結（結局）中途はんぱだったと思う」，「個人差も出てきて簡純（単純）には表せないと思う」というような類型化できないものがある。

4）英語では，音節 [ji:p] に対し，sheep, sheap, shepe の 3 語が存在し，同音異語によるスペルの問題もあるという (Dived. 1997. p.215)。言語と文字の普遍的な一面を覗かせる。

5）2000 年に公布された『九年義務教育全日制小学語文教学大綱（試用修訂版)』によると，中国では，小学校 6 年間の習得漢字は 3000 字と定められ，1，2 年生の低学年でも，習得字数は 1800 字で，うち 1200 字は書けるように要求されるという。日本の状況とは対照的である。

6）「文化審議会国語分科会」で「これからの時代に求められる国語力」について議論し，まとめられた答申案では，「心ぱい」，「こっ折」のような混ぜ書きをなくし，小学校で教える漢字を増やす方向を示しているという（『朝日新聞』2003/11/6 朝刊「社会」欄)。もちろん，「国語問題協議会」という組織が当該ホームページで「旧漢字」，「旧字体」を採用するような，「復活運動」は不用である。

7）フランスの歴史学者アラン・コルバン氏が「速度の文化」の時代について，「過去への関心が薄れ，現在に対する浅い関心だけが過剰になっている時代」と特徴づけ，「歴史の平面化」によって，「新しいものほど価値があるという方向へと社会全体の風潮が変わった」と指摘し，示唆に富んでいる（『朝日新聞』2003/11/12 朝刊「文化」欄)。漢字を「過去の存在」，「歴史の遺物」として位置づけられるのも，「速度の文化」の賜物であろう。

8）橋本萬太郎 鈴木孝夫 山田尚勇 (1987)『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』(大修館書店，485 頁）を参照。

9）漢字否定論は，1866 年に前島密が出した建白書「漢字御廃止之義」を発端として脈々と受け継がれており，戦後「当用漢字」が公布された時期に（1946 年）その気運が高まり，70 年代，80 年代にまで及んでいる。田中氏 (1975) の意見が突出している。「日本語が異常なほど音に鈍感なのは，漢字が音を気づかなくさせているからである」(207 頁）と結論付けている田中氏が，「私はしょっちゅう編集者から誤字をただされたり，字引に頼らざるを得ない。こういうばかばかしい労力を，どうして，他の言語の話し手に強いることができるだろうか。そうして，日本語が，その辛苦に対してみあうだけの，すぐれた思想や芸術を提供できるかどうか，私は柳田国男と共に，全く悲観的なのである」(216 頁）と述べている。

10）小泉保 (1978)『日本語の正書法』(大修館書店，274 頁）を参照。

11）(68)－(71) は筆者が出講している社会人大学院の大学院生が作成した日本語から採集したデータである。

12）日本語を外国語のように真剣に学習することが場合によって必要かも知れない。フランス文学の研究者野内良三氏が，著書『うまい！日本語を書く 12 の技術』(2003, NHK 出版）の中で，学生の日本語能力の低下に触れ，「フランス語を教えるよりもむしろ日本語を教えるべきではないかと，冗談ではなくほんとうに思う」と述懐して，「日本語をとりあえず外国語として捉え返すこと」を訴えている（4－5 頁)。同感である。

参考文献

加納喜光（1973）『パズル式漢字教室』徳間書店
――――（2000）『いつも迷ってしまう漢字大疑問』講談社
川瀬生郎（1988）日本語教育における漢字『漢字講座 12　漢字教育』明治書院
国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
佐藤喜代治編（1977）『国語学研究事典』明治書院
真田和子（1989）同音漢字の書き分け『講座日本語と日本語教育 日本語の文字と表記（下）』明治書院
志田唯史（2001）『誤用漢字を退治する本』講談社
田中克彦（1975）『言語の思想』NHK ブックス
富田隆行 真田和子（1991）『教師用日本語教育ハンドブック 表記 改定新版』凡人社
花田修一（1988）読み書きの指導『漢字講座 12 漢字教育』明治書院
David Crystal. (1997) *The Cambridge Encyclopedia of Language.* Cambridge University Press.
Shibatani, M. (1991) *The Languages of Japan.* Cambridge University Press.

ABSTRACT

Japanese Students' Mistakes of Chinese Characters

Tao Lu
Faculty of Integrated Arts and Sciences,
Hiroshima University

This paper is a survey concerning the mistakes of Chinese characters (*Kanji*) found in material written by Japanese students. The types, reasons, and influences of the mistakes are investigated here based on 75 examples.

In Section 2, four types of mistakes found in Chinese words (*Kango*) are examined. They are: a) mistakes of radicals, b) confusion of different characters, c) confusion of different words mostly for the reason of homoymy, and d) using different characters to make up non-existent words which look like Chinese compounds. In Section 3, we look into the mistakes found in Japanese words (*Wago*). These analyses show us that mistakes with Chinese characters are not so complex, and are similar to mistakes made by junior high school students or foreign students.

In Section 4, the reasons for the mistakes are postulated. These include the orthographic complexity of Chinese characters, teaching restrictions in compulsory education, the lack of writing activities, attitudes towards writing activities, insufficiency of Japanese vocabulary, and scholars discouraging the use of Chinese characters.

In Section 5, four influences of the mistakes are discussed: first, the ability for true-false judgments concerning the characters even when writing on a word-processor; second, the accelerating confusion of character use in public life; third, the weakening of vocabulary or communication skills; and last, the careless attitudes toward study habits and foreign language learning.

It seems that improving not only skills with Chinese characters but also Japanese ability in general is as important at university as learning foreign languages for the Japanese students.